

卷末資料 1

市民団体・NPOへのアンケート調査関連資料

平成 25 年 9 月 18 日

村上・岩船地域で活動する
市民団体・NPOの皆様へ

特定非営利活動法人
都岐沙羅パートナーズセンター

民間同士の連携・協働による「課題解決」「新たな取り組みの創出」を
増やしていくためのアンケート調査にご協力下さい。

常日頃、当団体の活動に格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

今、私たちは、「民間（市民団体・NPO・民間企業等）同士の連携・協働」が、これからの地域づくりにおいて重要なテーマになると考えています。事実、民間同士がお互いに手を組むことで、それぞれが抱えていた課題が解決したり、新しい取り組み・ビジネスが生まれたりする事例が、地域内で散見されています。

「お互いにメリットのある形での連携・協働を生み出す仕組みをつくろう！」私たちはこれを実現させるべく、一般社団法人いわふね青年会議所の方々と協働で「多様な担い手の連携・協働によるCSV（Creating Shared Value／双方にとって有益な取り組み）創出プロジェクト」に取り組んでいます。（事業概要は別紙をご参照下さい。）

このプロジェクトを推進するにあたり、まずは地域内で活動する皆さんから、

- ①各々の団体概要
- ②地域あるいは他団体に対して自分たちが「提供できること」
- ③自分たちが「求めていること」

という3つの情報をご提供頂きたいと考えています。頂いた情報をもとに、私たちは民間同士の連携・協働を生み出す具体的な場（情報発信イベントやマッチングイベント）を設け、皆さんが抱えている問題・課題の解決や、新しい取り組み・事業の創出に寄与したいと思っております。

つきましては、同封の調査シートを9月30日（月）までにご回答頂きたく、お願い申し上げます。次第です。大変お忙しい中、お手数をおかけしますが、本事業の趣旨をご理解頂き、何卒ご協力賜りますようお願い申し上げます。

※調査シートは、都岐沙羅パートナーズセンターのブログからもダウンロードできます。

【本件に関するお問い合わせ先】

都岐沙羅パートナーズセンター（担当：齋藤、佐藤）

TEL. 72-0663／FAX. 72-0723

e-mail : info-tsukisara@tsukisara.org

～民間同士の連携・協働による「課題解決」「新たな取り組みの創出」を増やそう！～

市民団体・NPOの「提供できること」「求めていること」調査シート

本調査シートをご記入頂きましたら、同封の封筒又はFAX（0254-72-0723）にてご返送下さい。

団体名			
代表者名		連絡責任者	
団体所在地	〒		
連絡先等	TEL	FAX	
	メールアドレス		
	ホームページ URL		
活動エリア 該当するものに 1つだけ○印を 付けて下さい	1 村上・岩船地域全域	4 朝日地区	7 荒川地区
	2 村上市全域	5 村上地区	8 関川村
	3 山北地区	6 神林地区	
活動目的			
活動内容			
活動実績			

	内容	条件等
提供できる こと		
してほしい こと		
団体PR		

多様な担い手の連携・協働によるCSV (Creating Shared Value) 創出プロジェクト 事業概要

特定非営利活動法人 都岐沙羅パートナーズセンター

【事業概要】

「私たちは、地域内の財を集め、つなぎ、支えながら、広がりのある『公』を創造することで、持続可能な地域社会づくりに貢献します。」これは都岐沙羅パートナーズセンターが設立当初から掲げているミッションです。この実現には、民民連携、特に住民・NPOと民間企業、社会起業家との連携・協働を促進させることが不可欠という認識のもと、これまでに様々な事業を展開してきました。

私たちが活動を開始してから10年以上が経過した今、地域・社会の状況は大きく変化しました。CSR（企業の社会的責任）という言葉が一般化し、企業の社会参加は当たり前のこととして認識されるようになりました。しかし、企業を取り巻く経営環境は年々厳しさを増しており、単なる“企業の社会参加・CSR”というコンセプトだけで民民連携を持続させることは、現実的に難しくなっています。そのため、これからはCSV (Creating Shared Value/社会課題の解決と企業の利益を両立させ、社会と企業の両方に価値を生み出す取り組み) という考え方にに基づき、民民連携を促す仕組みが必要になってきています。

そこで本事業では、市民団体・NPO・民間企業同士の連携・協働を促し、CSVという視点から民民連携をより一層推進していくことを目的に、次の事業を実施します。

①地域内で活動する市民団体・NPOの「団体情報」「提供できること」「求めていること」
の情報収集

②市民団体・NPOと民間企業の連携・協働事例実態調査

③新しい民民連携を促すマッチングイベントの開催

※今回、皆様をお願いしているアンケートは、①の事業に該当します。

【今回のアンケート結果はどう活かされるのか？】

- 1) 地域内でどんな団体がどのような活動しているのかを地域の方々に知ってもらうために、各団体の基本情報（団体名・活動内容・主な実績等）を情報紙という形で地域内に全戸配布します。（11月上旬に新聞折り込みで配布予定）
- 2) いわふね青年会議所のホームページにて、「まちづくりデータベース(仮)」として、団体情報の発信を行います。また、村上プラザにおいて、各団体の情報を広く地域住民に発信するイベント（パネル展を予定）を開催します。（11月上旬開催予定）

※詳しくは同封の“「まちづくりデータベース」事業趣意書”をご覧ください。

【来年1月下旬にマッチングイベントを開催します】

市民団体・NPO・民間企業・各種機関等が一堂に会し、お互いに連携・協働して取り組める活動・事業を生み出すための「マッチングイベント」を、来年1月下旬に開催します。イベントでは、今回のアンケートでご回答いただいた「提供できること」「求めていること」をベースにし、具体的な成果が生まれるような仕組みにしたいと考えています。

「まちづくりデータベース」事業趣意書

現在この地域は少子高齢化、人口減少が進みそれに伴う地域力の低下が懸念され、歴史や文化、豊かな自然という地域の宝を未来に継承していくことが難しくなっています。こうした状況の中、まちづくりに関わる多くの個人、団体が活動しています。今後そういった活動が今以上に重要になってきますが、それぞれの個人や団体単独での活動では限界があるのも事実です。活動を継続、発展させるには多くの住民の方にまちづくりへ関心を持ってもらうことや、個人や団体がより協力していくことが重要になってきます。

そこで私ども一般社団法人いわふね青年会議所では、インターネット上にそれぞれの団体の概要をまとめて掲載する「まちづくりデータベース」の作成を計画しました。これは多くの方々にこの地域で活動しているまちづくり団体を知ってもらうため、また地域内でのどのようなまちづくりが行われているか共有することと、それぞれが持っているリソース（資源）を上手く活用して、地域内の助け合いを活性化しようということが大きな目的です。

またデータベース作成と併せて、11月にまちづくり団体の情報発信イベントを計画しています。データベースとの相乗効果でまちづくり団体の活動をPRできればと考えています。この地域をよりよくしたいという思いは、皆様共通するものだと思います。まちづくりデータベース事業にご理解、お力添えいただければ幸いです。

平成 25 年 9 月 吉日

一般社団法人いわふね青年会議所

2013 年度理事長 加藤 善典

まちづくり委員会 委員長 三科 孝幸

No	園名	園内情報	園外情報										園長PR			
			園名	園名	園名	園名	園名	園名	園名	園名	園名	園名				
1	<p>園址の近所を詳細に説明して頂くか、それを見学案内とする。</p> <p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>	<p>●園の概要</p> <p>●園の特色</p> <p>●園の歴史</p> <p>●園の環境</p> <p>●園の設備</p> <p>●園の行事</p> <p>●園の連絡先</p>

2019年度園外情報収集状況についてご報告いたします。園外情報収集は、園児の成長に大きく貢献するものと考えています。今後も園外情報収集を積極的に行い、園児の成長に貢献してまいります。

市民活動と企業との協働を考える

みんなが力を合わせれば何だってできる

～市民の力をもっとまちづくりに生かそう～

本チラシは、国土交通省「平成 25 年度地域づくり活動に対する中間支援活動のコンテンツ整備のための優良な取組事例調査」の採択を受けて、NPO 法人都岐沙羅/パートナーズセンターが取り組んでいる「多様な担い手の連携・協働による CSV (Creating Shared Value) 創出プロジェクト」の一環で作成しています。

11/5(火)
18:00-20:00



夜のまちカフェ

～みんなでまちづくりを語り合おう～

★会場：村上プラザ 2F プラザホール
★参加費：無料 (どなたでも参加できます)

主催：NPO 法人 都岐沙羅パートナーズセンター 一般社団法人いわふね青年会議所

市民活動団体パネル展

～市民団体の活動を知らう～

岩船、村上地域には様々な分野で活躍するまちづくり団体がたくさんあります。皆様、ぜひパネル展をご覧ください！

★会場：村上プラザ セントラルコート

主催：一般社団法人いわふね青年会議所

11/5(火) - 8(金)
10:00-20:00

高根フロンティアクラブ&大洋酒造株式会社 協働事例の舞台裏を語る

対談

山の集落と酒造会社が手を組んだ！



益田 茂彦さん

大洋酒造株式会社 (昭和 18 年設立) の 7 代目社長として平成 13 年より現在に至る。地元のおいしい 14 の酒蔵が合併してきた会社として、地域おこし限定酒・地域限定酒なども製造を行っている。また平成 23 年には常設の展示場「和水蔵」を開場し地域の観光拠点として多くの観光客を受け入れている。

売りたいんだけど、売る方法として地域ブランドを利用したかったんですよ。地酒をどう世間に印象づけたいかを考えた時、地域の人達と共に活動していますよってことがこれからは大事だと思ったんです。そういう発想でどぶろくも指導してきましたし、清酒鈴ヶ滝もこの機に PR できれば、こっちも地域興しならぬ大洋盛興しにつながると思ったわけです。つまり企業のニーズと地域のニーズがうまく合致したってことだね。

遠山 そうですね、片方だけでなく想いが一緒に高まっていくのが一番理想的ですね。でも大洋酒造さんは高根と協働して行った雪中貯蔵イベントを通して具体的にどんなメリットはあったんですか。

益田 まず、新聞で取り上げてくれるし、テレビにも出たしね。そのお陰で頒布会の会員もずっと維持されてるし、人との繋がりができて東京会館で大洋盛を味わう会も開催でき、東京のファンもかなり増えましたよ。

遠山 高根でも大洋酒造のお客様との繋がりが出来て、IRORI にも多くの方々に来てくれる様になりました。ただ、今 IRORI で働いてもらっている方々は本当にぎりぎりの時給で働いてもらっているの、まだまだだとは思っています。益田 フロンティアクラブの活動自体でお金が出なくても、それをやることで他に利益が出ればいいんだけどね。

遠山 高根は、IRORI を開設したことによっていろいろなお金が動くようにはなっているんです。例えば IRORI で出すそばは地元農家に委託栽培していますし、それによって助成金も入ってくるので、それをイベントにも使えるようにしてあります。また、IRORI に農作物などを持ち込ん

でもらうと、金銭的にははいたしたことはないんですが、集落内でお金が回っている状況を作り出すことができています。

益田 それはいいね。

遠山 話は変わるけど、大洋酒造は米づくりもしていますよね。

益田 あれば社員教育の一環でかれこれ 10 年くらいやってるなあ。杜氏の田澤さんの田んぼを使って、今は越後産を植えているんです。社員教育から始まったけど今はどちらかというと体験型 PR の意味が強いね。外部の人に対して「このあいだ稲刈りしてきたよ」とか、「そのお米でつくった酒がこれだよ」ってお客さんに自慢話が出るわけだ。

遠山 年々社員の方の意識も変わってきましたか？

益田 そうですね。社員も最初はねえ、高根の雪中貯蔵をするとか、田植えするだの、毎年人形さま巡りの会場に開放するだの、普通の仕事以外になんでこんな余計な事をするんだって気持ちがいっぱいだったと思いますよ。だけどそれを何回もやっているところの狙い所とか効果が理解できるようになってくるわけです。その一番は和水蔵 (なごみくら) の開設ですね。観光バスがこれだけ来るようになったんだから、社員の意識も自ずと高まるよね。

遠山 高根では、まず少人数で集まって自分たちの夢を語り合うことから意識が変わっていったんです。語り合ううちに情熱が湧いてきて具体的な行動に移るわけだけど、高根の場合はフロンティアクラブという組織をつくったことと、そこが中心になって集落全体でワークショップを開催し、これからの集落づくりのことをみんなで考えたことが大きかったなあ。

益田 普通、山奥の集落はひっそり暮らしていてよそ者には警戒心を持っている、そういうイメージがあるじゃない。でも高根は全然無い、積極性がある、人の話も聞く度量がある。頭もいい、行動力もある。すばらしいと思う。だから不思議ではない。

遠山 ありがとうございます。18 年もフロンティアクラブをやってきたけど、どんなに優秀な組織でも、どんな優秀な個人でも、一人じゃ地域なんて変えられないんですよ、やっぱり。周りのみんなを巻き込んでいくことで初めて地域がよくなっていくってこと。それは長くやってきて学んだことですね。それと繋がりが大切。大洋酒造さんともそうだし、学生さんとの繋がりもね。これからも大事にしていきたいです。



遠山 政好さん

高根フロンティアクラブ (平成 8 年結成) の 3 代目会長として平成 20 年より現在に至る。クラブの活動として高根山のおいしさ学校 (食堂、各種体験) の運営・季節ごとのイベント開催・ひまわり栽培などの景観整備を行っている。また大手企業の CSR 活動、大学生の現地実習なども積極的に受け入れをしている。

遠山 高根フロンティアクラブと大洋酒造さんとの間わりは、どぶろく造りを大洋酒造さんから教えてもらって平成 17 年頃からですよね。

益田 そうだね、高根でも経済特区でどぶろくを製造出来ることになったのと、廃校を利用した山の食堂 IRORI がオープンしたのがきっかけだね。どぶろくも造る以上は本気でやって成功してもらいたいの、私はどぶろくを造る鈴木さんに手紙を書いて、「金をかけるな、イベントをやって人を集めろ」と伝えたんだけど、鈴木さんは高根フロンティアクラブを動かしてそれをきちんと実践してくれたわけですよ。

遠山 そのイベントというのが一緒に始めた雪中貯蔵イベントですね。

益田 そう。大洋酒造のねらいは最終的に大洋盛を



市民活動団体パネル展とまちづくりデータベース公開のお知らせ

「岩船、村上地域にはどんな市民団体やまちづくり団体があるの?」、「活動を広くたくさんの人に知ってもらいたい!」、「ボランティアやまちづくりに関心があるけど、どうしたらいい?」、「まちづくり活動や生活をしている中で困りごとがあるけど、どこに相談すればいいの?」など、まちづくりに興味、関心のある人が多くなってきています。

また魅力あふれるこの岩船、村上地域を後世に伝えていくためには、住民相互の助け合いやまちづくり活動が大変重要になってきます。そこで(一社)いわふね青年会議所では、地域のまちづくり団体の情報を一堂に集めたパネル展と、WEB上でのまちづくりデータベースの作成を計画し、ここに掲載してあります団体のご協力をいただきました。各団体の詳細情報につきましては、パネル展およびまちづくりデータベースで公開

いたします。興味のある団体があれば「一緒に活動したい!、参加したい!、協力したい!」と連絡を取ってみてください。このパネル展とまちづくりデータベースが多くの人に活用いただき、この地域が活性化されればと願っております。

まちづくりデータベースはこちらから

URL <http://www.iwafune.ne.jp/~iwafunejc/>

いわふねJC

検索

11月5日～順次公開

募集!!

パネル展及びデータベースに掲載希望のまちづくり活動をしている市民団体、NPO 団体等を募集しております。詳しくは(一社)いわふね青年会議所までご連絡ください。
※営利目的、宗教、政治活動などの情報は掲載できません。

お申込み・お問合せ先

一般社団法人 いわふね青年会議所

〒958-0841 村上市小町4-10 村上商工会議所内 TEL 0254-53-4257 FAX 0254-53-0172
E-mail iwaseinen@iwafune.ne.jp 事務局：加藤



現在データベースに掲載予定の市民団体

活動地域	団体の名称	活動の目的
浦安村	あわしまふうど	自分たちの住んでいる地域に誇りを持って生きる。
関川村	関川村商工会青年部	青年部活動を通じ、地元関川村の魅力や村内外にアピールし、活性化をはかること。
	NPO 法人 ふれあいネットせきかわ	関川村内の心身に障がいをもつ人たちの為、個人を尊重し地域で誰もが生活できるように必要な支援活動をし、地域福祉の発展に貢献することを目的とする。
荒川地区	あらかわ地域まちづくり協議会	「絆で結ばれ自然と共に生きるまちあらかわ」の理念のもと、まちづくり計画で定めた7つの将来像の実現を目指すと共に、地域課題の解決や地域の活性化を図り、この地域がより元気な地域となるよう市民協働のまちづくりを推進する。
神林地区	神林おやこ劇を観る会	人は子どもの時、たくさんの「ほんもの」に出会って、心に様々な感動を刻み込んでおくことで心豊かに成長していくものとする。そこで親子ですくめた子ども文化・舞台芸術を鑑賞することを通して、子どもたちの感性を豊かに育むことを目的とする。
	砂山地域まちづくり協議会	市民協働のまちづくりを進めるため、各地域の魅力や個性といった「地域らしさ」や地域の状況に合わせたきめ細かな支援を行政とともに進め、活気ある元気な地域を造ることを目標としている。
	神納地域まちづくり協議会	市民協働のまちづくりを進めるため、地域に暮らす住民がお互い知恵を出し合い、協力し合って、地域の将来像を考え、その実現に向けて行動することによって、活気と魅力あふれる元気な地域を形成していくこと。
	西神納地域まちづくり協議会	市民協働のまちづくりを進めるため、各地域の魅力や個性といった「地域らしさ」や地域の状況に合わせたきめ細かな支援を行政とともに進め、活気ある元気な地域を造ることを目標としている。
	神納東地域まちづくり協議会	市民協働のまちづくりを進めるため、各地域の魅力や個性といった「地域らしさ」や地域の状況に合わせたきめ細かな支援を行政とともに進め、活気ある元気な地域を造ることを目標としている。
	平林地域まちづくり協議会	市民協働のまちづくりを進めるため、各地域の魅力や個性といった「地域らしさ」や地域の状況に合わせたきめ細かな支援を行政とともに進め、活気ある元気な地域を造ることを目標としている。
村上地区	神林商工会青年部	1. 若手経営者及び若手後継者のための研修事業の実施 2. 地域活性化のための地域振興事業の実施 3. 役員親睦事業及び組織強化事業の実施
	NPO 法人 総合スポーツクラブ・ウェルネスむらかみ	1. スポーツ活動、指導を通じて地域住民の健康づくり、仲間づくりをめざす 2. 村上地区体育施設の維持管理(指定管理者)
	一般財団法人 村上城跡保存育英会	当法人は、村上城跡を保存する事業を行い、市民の憩いの場としての「お城山」を健康増進及び歴史的文化の育成に活用してゆくに寄与することを目的とする。
	山居山山里整備の会	森林、林業、自然環境等教育の場として、保健休養など憩いの場として市民の活用を目指すため、森林整備などを行うことを目的とする。(羽黒町、南町 1、2 丁目、山居町 1、2 丁目の賛同者及び他地区で会の趣旨に賛同する者をもって構成) 山居山「里山」を整備し上記目的に資する。
	活気あふれる街瀬波まちづくり推進協議会	スローガン「世代を超えて、仲が良く、魅力と活気あふれるまちをつくらう。」
	山辺里地区まちづくり協議会	スローガン「あふれる緑 つながる和 生き生きさべり」
	上海府地区町づくり推進委員会	①日頃から防災・防犯に努め、住民が安心して暮らせる上海府をめざす。 ②人と人のつながりを大切に、若者から高齢者まで住みよい上海府をめざす。 ③上海府地域の景観・環境の保全に取り組む。 ④上海府地域の資源(自然・人材・施設)を活かしたまちづくりをめざす。 ⑤老若男女問わず住民の意見を積極的に取り入れた組織づくりを行い、住民誰もが参加しやすい事業実施に努める。
村上トライあんぐる	村上地域での住まい、景観、環境、暮らしの調査を行い、人々とネットワークづくりを進め、より住みよいまちを目指す。	
岩船まちづくり協議会	スローガン「まちづくり自ら町内(まち)から地域から」	
鶴田地区	大須戸能保存会	伝統事業の紹介と保存会の活動について理解を得る。
	高根フロンティアクラブ	集落の活性化
	三面地域まちづくり協議会	三面地域に暮らす人のために、三面の雄大な自然と伝統・風景を大切にしながら、活気と地域愛に満ちたまちをつくることを目的とする。
	いかしつらの会	日本の文化である和服を捨てたくないという想いで、リメイクを行っている。教室を通じて、和服を大事にする気持ちを広げていく。洋服を生まれ変わらせる。
山北地区	朝日商工会	商工会は、地域に密着した唯一の総合経済団体です。地域の事業者が業種にかかわらず会員となって、お互いの事業の発展や地域の発展のため総合的活動を行う団体です。また、中小企業経営者支援法に基づき、経営革新など支援機関に認定され、多様化する経営課題に対し専門性の高い支援を行っています。
	山北地区まちづくり協議会	山北地域において地域住民と地域各種団体及び行政との連携のもとに集落・地域の元気づくりと地域課題の解決に努め、住んでよかったと思える地域づくりの推進を図ることを目的とする。
	夢 21・さんぽく塾	地域を知り、考えるための学習活動や地域づくりの実践活動のほか、塾生の交流と人材育成の活動など、地域住民の若者が主体となってまちづくりや仲間づくりを進めることを目的とする。
岩船、村上地域全域	さんぽく生業の里企業組合	・地域活性化・高齢者の就労の場づくり・伝統ある工芸及び食を後世に伝える
	NPO 法人 おたすけさんぽく	地域住民参画による身近で気軽に利用できる福祉サービスの提供に関する事業を行い、住民が安心していきいきと暮らせるまちづくりに寄与する。
	はつめの会	地域の活性化と高齢者や障害者の生き甲斐づくりを目指しています。
	ゆりの会企業組合	地産地消の観点から地元のものにこだわらなから農産加工をし、販売する。母ちゃんたちが元気で働き、明るい村づくりを目指す。
	NPO 法人 希楽々	「いつでも、だれもが、いつまでも」気軽に楽しめるスポーツ活動及び文化活動の振興、地域住民の健全な心身の育成、他団体との協働を図り、誰もが参画できる健康で楽しく元気なまちづくりに寄与することを目的とする。
	村上地域まちづくり協議会	地域に暮らす住民がお互いに知恵を出し合い、協力し合って、住民自らが地域の将来像を考え、その実現に向けて行動することによって、活気と魅力あふれる元気な地域を形成していくことを目的とする。
	村上観光文化活性化協議会	村上岩船地域の観光・文化・伝統行事・特産品などを掘り起こし、地域の活性化と観光振興につながるよう活動をする。また関係者に働きかけをする。
	NPO 法人 健康サポートプラス	1. 児童健全育成事業 2. 一般健康づくり事業 3. 高齢者健康づくり事業
	NPO 法人 都岐沙羅パートナーズセンター	岩船地域の住民が元気に生き生き暮らすため、まちづくりの推進と支援に関する事業を行うと共に、住民、企業、行政のパートナーシップによる地域社会づくりに寄与することを目的とする。
	特色のある緑の公園を造る会	・植樹を通じ自然を学び、併せて環境保全とふるさと意識の高揚を図る。・緑化活動による地域の活性化。
朝日村まはりの花の会	・養蚕文化伝承・総合学習のお手伝い・まゆクラフトの楽しさを伝える	
村上児童福祉	いわふね村上フィルムコミッション	私たちは、地域の多様な魅力を映像化し自信と誇りをもてる地域文化の発展に貢献していきます。
	大葉澤城跡保存会	戦国時代、勇敢武将としての地方を治め、現在の礎を築いた先人、先史を敬い、深く古えの歴史を学び深く知り、今ある城跡内の様々な遺構などを整備拡充し、後世へと守り伝えていきたい。
	ECHIGO 歩く会 えちこあるこうかい	楽しく歩くことを通じ、健康増進を図り、交流を深め、自分自身もより人や社会を明るく元気にする。～歩く習慣づくりを通して健康寿命を伸ばす～
	村上地域若者サポートステーション	「自分に合った仕事が見つからない」、「なかなか仕事に就けない」、「仕事が続かない」という 15 歳～39 歳までの無業の若者に、職業的自立を促し就業支援を実施し、その人に合った仕事探しをハローワークと連携して支援しています。若年者の貧困防止の観点から学校と連携し、高校などの中途退学の支援と不登校を防止するため、学校在籍者とその保護者の相談を受け、若年者の貧困防止、貧困の連鎖を断ち取る取り組みを行っています。
	企業組合 労協センター事業団村上事業所	働く人が生きがいを持った働き方、人間らしい働き方をするため、お互いが協力し、助け合い、共に生きる「新しい福祉社会」を地域に築く活動を行っています。
東京	一般社団法人 いわふね青年会議所	いわふね青年会議所は、次代の担い手たる責任感をもった 20 歳から 40 歳までの指導者たらんとする青年の団体が「明るい豊かな社会」の実現に向け、まちづくりや青少年育成などをテーマに地域に根ざした多種多様な事業を行っています。
	社会福祉法人 村上市社会福祉協議会	村上市における社会福祉事業その他の社会福祉を目的とする事業の健全な発達及び社会福祉に関する活動の活性化により、支え合いと助け合いのある福祉のまちづくりを目標とした、地域福祉の推進を図ることを目的とする。
	アピオス友の会	アピオスを食べてもらって広めたい。特産にしたい。
東京	東京村上市郷友会	ふるさと村上を東京で互いに懐かしむ事を最大の目的として、出来れば活動を通じ村上市の発展に寄与したい。

夜のまちカフェ

話し合いの概要

協働を視野に入れた地域活性化のアイデア

- ・シャトルバスの運行をイベント時に協働で行えないか
- ・レトロバスや人力車を出す
- ・スタンブラー方式：一日体験イベント、二日目屏風まつりなど
- ・子どもを中心とした農身体験ツアー
- ・人形さま巡りや屏風まつりなど、人が集まるイベントを他地域につなげていく

例えば、鷲ヶ巣山登山や高根のそばまつり、苞が流れなど

- ・人力車を復活させたい
- ・ツアープランを業者任せにしないで、もっとバラエティーに富んだツアーを実施する
- ・地域活性化協議会は、もっと他団体や企業等と連携していくべき
- ・子どもを集めれば賑やかになる
- ・地域の特徴をもっと生かすべき 例：奥三面でハンジージャンプ
- ・駅前をもっと華やかにする
- ・移動が大変なので安くするプランを考える
- ・バスを利用した観光コースを作る
- ・つかみ取りなどの自然体験は子どもが喜ぶ
- ・子どもの体験が少ない
- ・ラフティングのコースづくり
- ・冬の観光を考え、もっと雪を活かす
- ・美味しい食べ物があるので、それを活かす
- ・伝統行事の復活をすると良い（小正月のだんごの木、どんと焼きなど）
- ・スキートレッキング
- ・スポーツクラブの合併、または協働事業を増やす
- ・もっとお寺に人を呼びたい、使ってもらいたい
- ・塩谷の醤油蔵をもっと観光客に届けてもらいたい
- ・異業種の情報紙を定期発行してはどうか？
- ・弁当屋と農業のコラボレーションができないか

POINT!
 つながりをつなぐには、コトを起すことが重要！



今までなかった駅弁をつくる

食の宝庫である村上にも関わらず、未だ駅弁がない。SLも走っているのだから、地元農家や宿泊施設、JRなどが協働を行って新しい駅弁を企画して地域活性化につなげたい。

協働が進まない理由

- ・お互いの理解を進めるのが難しい
- ・持続するのがたいへん
- ・コーディネートしてくれる人が少ない
- ・お互いにメリットがないと成立しない
- ・行政のスピードが遅い
- ・市長に直接話すと、その下のクラスの管理職がへそを曲げる
- ・一生懸命やっている人たちがなかなか頼られない

POINT!
 協働に対する理解をもっと深めるべき

POINT!
 お互いの思いを共有する必要がある

POINT!
 お互いの課題ややりたいことを話せる場が必要

協働を行うに当たって大切なこと

- ・葉っぱビジネスのように高齢者を使ったビジネスを企画すべき
- ・外から来た人と一緒に地域の魅力を再発見することが大切
- ・役員の仕事量が減れば新しいことも考えられるようになる
- ・楽しそうに活動していることが大切
- ・他地域との連携も必要
- ・もっと地域のことを知る必要がある
- ・今までなかったような面白いプランをたてられるかどうか
- ・集落の協力が必須
- ・情報だけではなくアクションにつながると good!
- ・自ら発信していくことが大切
- ・知り合いがいるとコラボは始めやすい（能登新 + 富士美園）
- ・これまで接点のなかった人との繋がりをつくる必要がある
- ・それぞれの連携が大切
- ・観光の目玉は昔からその地にあったものであるべき

POINT!
 もっともっとお母さんたちへの情報提供を強化すべき

地域内の事例に学ぶ

- ・高根では東京の学生さんなど、若い人との結びつきが強い
- ・企業のCSRもそういう土壌の中で展開されている
- ・活動を続けると、みんな会費を納めてくれる（フィルムコミッション）
- ・ロケ地を借りる時に企業の協力が必須
- ・地域の宝物である「水」を使っていくと美味しいお酒が造れるというのがそのスタート。お酒に使うことで地域資源に光が当たった（鈴ヶ滝、吉祥清水）
- ・お寺を使った写真展を行っている（お寺はかつて公民館の役目を果たしていた）。

地域の課題

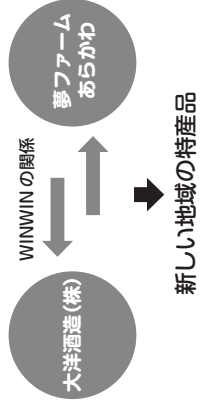
POINT!
 そもそも地域側の課題がオープンになっていない

- ・役員の高齢化が深刻
- ・イベントに人が集まらな
- ・子どもが少なく集まらない
- ・役員自体を入れ替えないと人が集まらない
- ・後継者不足
- ・人材はたくさんいるが、やる気スイッチが入るタイミングが難しい
- ・いろいろなることをか持ちしている人が多い
- ・地域全体でどんな素材があるか、ということがわからない
- （地域のお土産は何かと聞かれて答えられないものが少ない）
- ・どうすれば効果的に人を集められるかが問題
- ・農工商連携フェアは、その後の繋がりが減ってしまっている
- ・面倒くさいイメージがあるため会員が減っている
- ・伝統芸能が少子化で続けられなくなっている（大場沢）

POINT!
 地域の魅力をもう一度再発見することが大切

新しいいちご酒をつくる

大洋酒造と夢ファームあらかわの間で、協働事業を生み出せよう。夢ファームで今まで捨てていた B 級品のいちごを大洋酒造に提供し、大洋酒造がいちご酒をつくる。



具体的な協働企画

具体的な協働企画

新しい情報発信のアイデア

- ・新潟（地域）を知ってもらふ冊子を作りたい。
- ・保育園の跡地など情報発信の拠点として使う→場所が必要。
- ・小中学生が読める講座報をつくる
- ・毎週のイベントごとに巡回開催イベントを来場者に告知し、それをリリース形式でつなげていく。
- ・松葉ガニのようなブランドを示すネームのタグを作成すると良いのでは
- ・情報を得られる拠点を作る（まちカ7エのような様々な団体や個人が集まりマッチングできる、協働できる機会を得られる）。
- ・1つの情報から派生し複数の情報を発信出来る仕組みを作る（ネットショップ、ブログでの1つの購入情報から関連するその他の商品情報提供がメールで送られてくる仕組みに倣った方法）。
- ・国外、県外のメディアを呼び込む。
- ・地元作物をテーマとしたドキュメント映画が出来たのでPRしたい。
- ・情報を発信する拠点が必要である。
- ・村上の情報サイトがあったらよいと思う（協働出資）。

新しい食のアイデア

- ・「プレミアムおにぎり」「村上の駅弁」が欲しい。
- ・村上の食材総選挙」を行って地元の食材を知る→総選挙で人気BEST3になった食材を駅弁に入れる。
- ・「体にいいモノ」…アピールするときのキャッチフレーズにあるといいのでは？（人を引きつけ易い）。
- ・タナタ食堂の様な地元産の食材の料理本があっても良いと思う（若い人にも興味をもってもらう為にフリーペーパー的なものでも）。
- ・こまつお祭りが農家レストランに繋がれば良い。
- ・荒川地区ではランダー栽培がうまくいかなかった。その代わりにブルーベリーを特産品として利用してはどうか。
- ・早上で使う堆肥の販売をテーマに、他との連携をして賑やかにしたい。
- ・農業生産者と飲食店のコラボイベントを開催。
- ・この地域には多くの食材があるので、B級グルメよりも各地に存在する郷土料理をPRして行くほうが良い。

POINT!

添加物の入っていない物を作りやすいイベントには人が集まっている

POINT!

子供たち向けの情報発信機能が必要

POINT!

世代が遠い人との交流が大切
経験からの情報発信が必要

POINT!

「人から人へ」の言伝なので信用性がある

POINT!

既存の施設に併設するパターンが主流になるだろう

POINT!

- 「拠点」は原点に戻って話すべき
- 拠点があるとお金がかかる。
 - 拠点がなくてもできるよりに考えることはできないか？
 - 最小限で効果的な拠点とは？
 - 拠点をどこにする前にできることではないか？
 - 拠点があると場所が限定される。
 - 動く拠点というのは考えられないか？
 - 今ある施設の一部を拠点にできないか？
 - 拠点よりもネットワークが重要。

テーマ

協働

参考事例

軽トラ市の開催
山北地区では、軽トラ市を開催しており、地元産の食材を地元で販売

POINT!

高齢化社会に適応した移動販売が大事

行商の人も少なくなり
人とのふれあいが少なくなった

POINT!

今までは家庭の中で出来ていた事が、今の生活環境では難しくなっている

POINT!

地域の味、家庭の味は残さなければいけない、伝えなければいけない
【課題解決のアイデア】

- 地元の人や先生となった講習会を開く。
- 学校給食を利用し、地産地消を進める。
- 子供たちに生産者の紹介をする。

POINT!

出荷できないB品の柿を活かしたい
【課題解決のアイデア】

- 干し柿にして色々な料理に使う。
- パティシエと『協働』してお菓子にする。
- 柿料理コンテスト等。
- 産地を見せてPRや温泉でも使ってもらおう。
- 現地に来てもらって体験してもらい持ち帰ってもらおう。

新しい拠点に対する意見

【拠点を作るためのアイデア】

- ・空き家を再利用し、シェアハウスのように設置してはどうか。
 - ・若者呼び込むために、カフェ的な拠点がいいのではないか。
 - ・いつかはカフェだが、イベント・印刷できる場所。
 - ・人がたくさん集まる場の一角にスペースを設けられないか。
- (例：スーパー、神社など)
- ・小規模な拠点がたくさんあるといい。

【拠点の役割・考え方】

- ・点を点とつなぐ役割、心の拠りどころとしての役割、情報集約・情報発信の場としての役割。

【駅前周辺を整備イメージ】

- ・ジャスコの跡地をもっと賑わいのある空間に整備すべき。
- ・病院の跡地は、たくさんの方の用事が一度に済むように施設を集約する。

【拠点の機能】

- ・情報共有の場所（話し合いの場）。
- ・常に誰かがいる場所。
- ・酒が飲める⇒交流の場となる。
- ・情報発信ができる設備（パソコン環境）。
- ・印刷ができる。
- ・活動するための設備や道具が揃っている。

POINT!

何かのついでに（拠点へ）行くケースが大半。逆にそこをうまく利用する

POINT!

拠点は地域内にたくさんあるが、それが線になって結ばれていない

POINT!

日中つなぎ役となれる人が常駐する拠点が必要

まちづくり協議会とは
支所の職員が動くことで
同じくしているのが現状

村上の駅弁の具体的なイメージ

※あくまで例として…

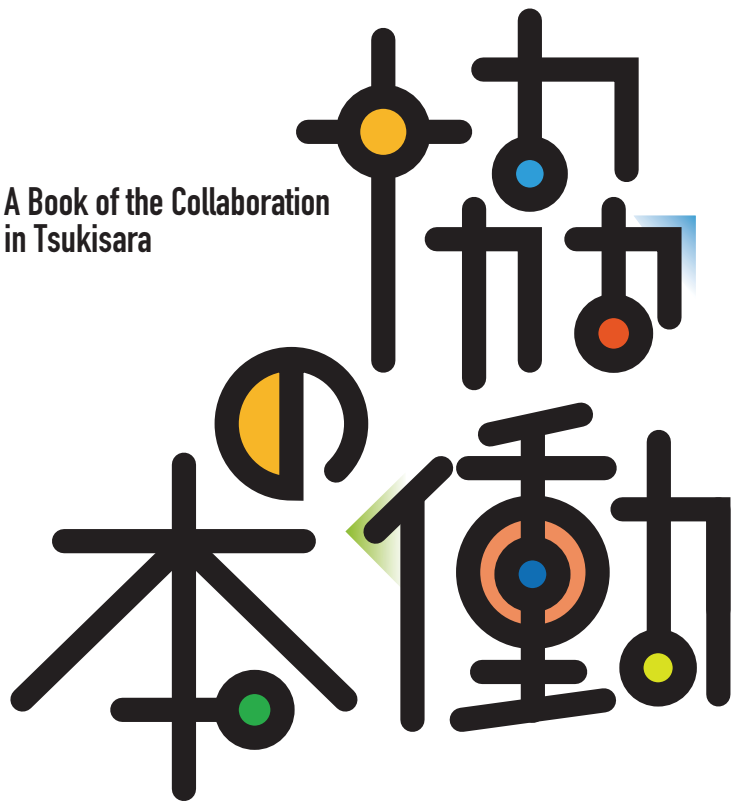
- (食材)
アビオスイモ、柔肌ねぎ、等
(料理)
しわ煮いも、やまもち、(他の地域に馴染みのない…たいかい、のっぺい)
- 有名食材(鮭、酒、村上牛、お茶、缶詰(筍、山菜)米、など)
おつまみ弁当とお酒付き、お食事用駅弁、など用途に合わせても面白い

- ストーリー性のある、顔になる駅弁、体にやさしい、春夏秋冬
- 色々な料理店で作るのとは面白い。
- 和、洋、伊
- お店の集客にもつながる、運動性が良い
- 地域全体で盛り上げるような取組が必要。(例) 村上食の陣など。
- 強いリーダーシップを発揮しないといふ現実的。
- こだわり抜いて作る。地元の方々に受け入れられるものにならないといけない
- 付加価値をつけることで、値段は変わる。相場(1000円から1500円程度)

POINT!

生産者と飲食店がコラボする機会をつくる

A Book of the Collaboration
in Tsukisara





はじめに

「私たちは、地域内の財を集め、つなぎ、支えながら、広がりのある『公』を創造することで、持続可能な地域社会づくりに貢献します。」これは私たち都岐沙羅パートナーズセンターが設立当初から掲げているミッションです。この実現にあたっては、住民連携、特に住民・NPOと民間企業、社会起業家との連携・協働を促進させることが不可欠であると考え、私たちは様々な事業に取り組んできました。

事業開始から十年以上が経過した今、地域・社会の状況は大きく変化しました。CSRという言葉が一般化し、企業の社会参加は当たり前のこととして認識されるようになりました。しかし、企業を取り巻く経営環境は年々厳しさを増しており、CSRというコンセプトだけで住民連携を促そうとしても、村上岩船地域のような中山間地域を含む地方では現実的に難しい状況にあります。

そんな中、私たちはCSV (Creating Shared Value) という概念に出会いました。これは、「社会課題の解決と企業の利益を両立させ、社会と企業の両方に価値を生み出す」という考え方で、この視点ならば当地域においても住民連携を促すことができるのではないかと私たちは考えました。

お互いにウィンウィンになる協働とはどのようなものか？その具体例をまとめたいものが、この「協働の本」です。協働を考える上で、皆さまのヒントになれば幸いです。

地元企業とNPOの協働（対談）

大洋酒造株式会社×高根フロンティアクラブ

県外企業と地域の協働

株式会社ノバレーゼ×山北地区

キヤノンマーケティングジャパン×高根集落

TOTOグループ×高根集落

NPOどうしの協働…まちカフェ

NPO法人都岐沙羅パートナーズセンター

×
一般社団法人いわね青年会議所

都岐沙羅パートナーズセンターのご紹介

22P

16P

12P

4P

地元企業と NPO との 協働事例（対談）

大洋酒造株式会社×高根フロンティアクラブ



大洋酒造株式会社 × 高根フロンティアクラブ

常に地域と共にある ということ

大洋酒造と高根集落との出会いは
「水」がきっかけ

益田 高根との付き合いの始まりは、「鈴ヶ滝」という酒を造った昭和六十一年からですね。そもその発端は、村おこしを手伝おうという発想でした。当時、水にこだわろうと思っていて、高根にある鈴ヶ滝の源泉まで調べに行っただんですね。そうしたら、とてもいい水だったので、それで鈴ヶ滝というお酒を造り、村おこしにつなげたいと思っただけです。

遠山 当時は四カ所の水を

使ったお酒を造っていただけですね。

益田 そうです。「お幕場盛（おまくばさかり）」と「光兎山（こうさぎさん）」という酒もありましたが、今も造り続けているのは「鈴ヶ滝」と「日本国」だけです。最初の頃は、真冬に雪中行軍して水汲みをやったんですよ。何にもわからないのに「ついて来い！」って言われて、かんじきも何もないのに雪の中を進んで……。もう、本当に大変な思いをしました（笑）

遠山 高根フロンティアクラブは結成してから十八年が経っていますが、大洋酒造さんとおつき合いは、毎年夏に開催している「ひまわりフェスティバル」の二回目からですね。

益田 当時の朝日村役場の職員の方から、手伝ってもらえないか？という声がかかったのがきっかけでした。

遠山 毎年、大勢の社員の方々にきてもらったこともあり、おかげさまでいいイベントに成長しました。毎年千人を超える参加者が来るイベントになっ

【対談】

大洋酒造株式会社 取締役社長

益田 茂彦さん

高根フロンティアクラブ 会長

遠山 政好さん

○対談日…平成二十五年十月九日

○場所…大洋酒造株式会社

○コーディネート…都岐沙羅ハート
ナースセンター 大滝 聡



大洋酒造株式会社 取締役社長
益田 茂彦さん



高根フロンティアクラブ 会長
遠山 政好さん

てます。

どぶろく造りが縁で関係が密になっていった

大滝 どぶろく造りに取り組み始めたのは、いつからですか？

遠山 どぶろく特区を取得したのは平成十七年です。その二年前の平成十五年に、廃校になった校舎を改装して食堂I R O R Iをオープンしました。

大滝 どうしてどぶろくを造ろうと思ったんですか？

遠山 当初はどぶろくじゃなくて、ワインを造ろうと思ってたんです。当時、高根では山葡萄の栽培が始まっていたので、それでワインを造れないか？というのが最初のアイデアでした。それで役場と相談したんですが、量的な問題や色々な制約があつてワイン特区は難しいだろうということになりました。ただ、食堂I R O R Iが既に営業を開始していたので、それならば特区の要件満たすことができるどぶろくをやろうということになり、どぶろく特区を取って大洋酒造さんから製造方法を詳しく教えて頂き、スタートしました。どぶろくを製造・販売するようになったので、それに合わせて清酒鈴ヶ滝もP Rしようということで、その年

の冬から雪中貯蔵というイベントを開始しました。



雪中貯蔵イベントがウィンウインの関係をつくった

大滝 雪中貯蔵というアイデアは、高根フロンティアクラブから提案したのですか？

益田 同じタイミングで双方から出された感じですね。大切なのはマーケティングなんです。どぶろくを造る以上は本気でやって成功してもらいたかったので、私はどぶろくを製造する鈴木さんに手紙を書いて、「金をかけるな、イベントをやって人を集めろ」と伝えたんです。鈴木さんは高根フロンティアクラブを動かしてそれをきちんと実践してくれたわけですよ。

遠山 そのイベントというのが一緒に始めた雪中貯蔵なんです。

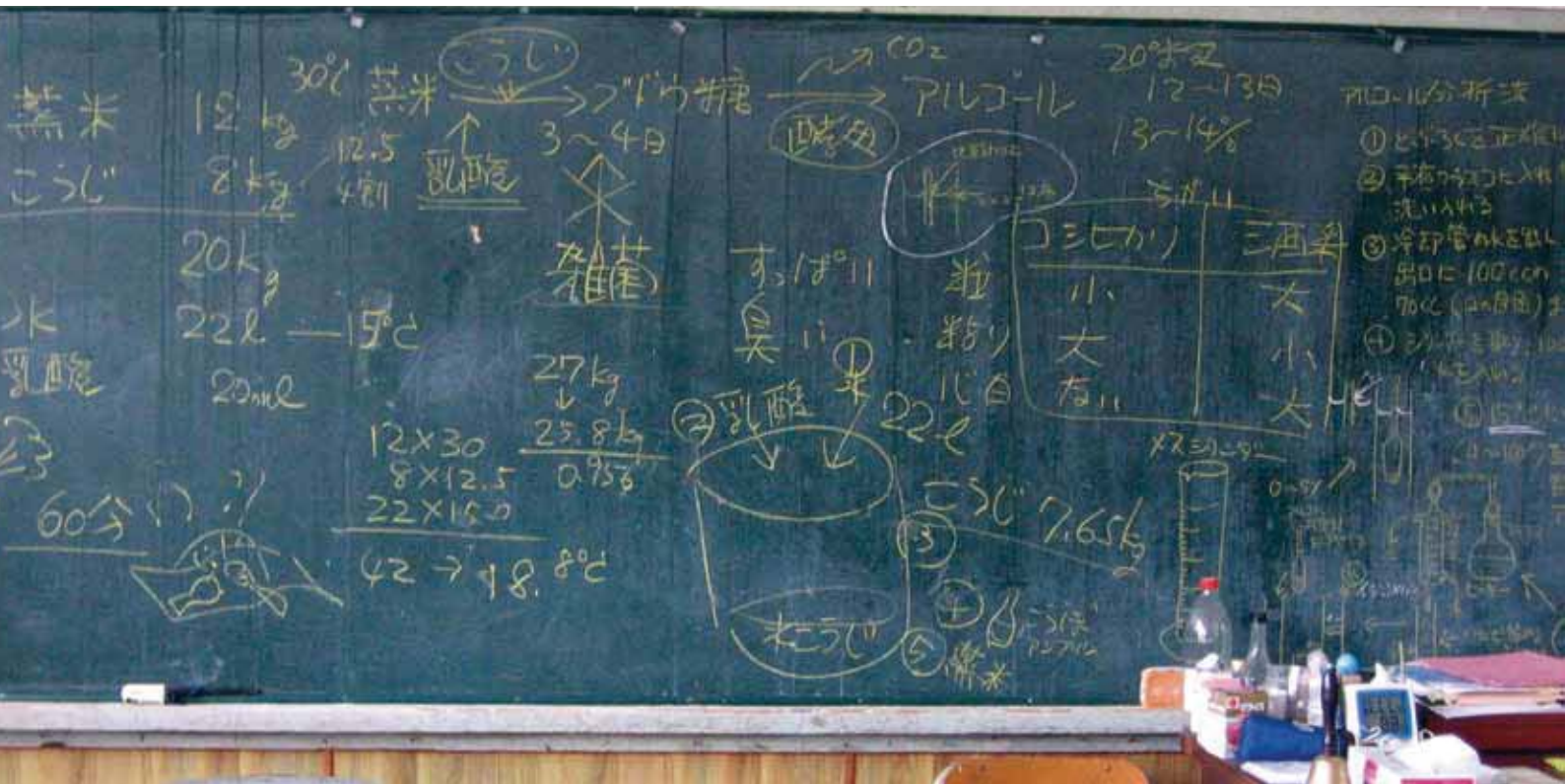
益田 当社の最終的なねらいは、我々の酒「大洋盛」をたくさん売ることです。そのためには、地域ブランドを利

用したかったというのが本音です。地酒をどう世間に印象づければいいのかを考えた時、「地域の人達と共に活動していますよ」ということが、これからは大事だと思つたんです。そういう発想でどぶろくも指導してきましたし、清酒鈴ヶ滝もこの機にP Rできれば、当社としても地域おこしならぬ「大洋盛おこし」につながると思つたわけです。つまり企業のニーズと地域のニーズがうまく合致したというわけです。

遠山 そうですね。片方だけじゃなくて両者の想いが一致し、それが一緒に高まっていったという、一番理想的な形でしたね。

大滝 大洋酒造さんは、高根との雪中貯蔵イベントを通じて、どんなメリツトがありましたか？

益田 まず新聞やテレビでたくさん取り上げられました。清酒鈴ヶ滝が紹介され、当社が地元にこだわっているという姿勢を世間にアピールできました。このおかげで、頒布会の会員が約七百名という人数をずっと維持できています。また、高根とのつながりが縁となり、東京会館で「大洋盛を味わう会」を開催することができるようになりました。もう七、八年続いてまして、東京のファンづくりに役立っています。



遠山 高根としては、大洋酒造のお客様との繋がりができたことで、食堂I R O R Iにも多くの方が来てくれるようになってきました。大洋酒造の頒布会を食堂I R O R Iでやるようになってからは、大洋酒造のお客様が蕎麦を食べに来てくれたり、遊びに来てくれたりするというケースが毎年増えていきますね。

食堂I R O R Iのオープンによってお金が集落内で循環しはじめた

益田 今の高根フロンティアクラブの課題は、もうちょっとメジャーになって採算がとれるようになり、皆さんに利益を分配させることです。高根に行った際にボランティアで頑張っている女性が、「一生懸命やっているけど、くたびれてきた」と言っていたことが忘れられません。そこで、瀬波温泉の旅館に声をかけて観光ルートにしようと仕掛けたことがあるんです。お隣の集落である大毎（おおごと）の吉祥清水で水汲みしてから、高根の天蓋高原へ行き、食堂I R O R Iでご飯食べてというコースはいんじゃないかと。十分に着地型観光になる商品だと思うのですが、残念ながらそれを売ってくれる人がいないですね・・・。

遠山 今、食堂I R O R Iで働いてい

る方の時給は、正直なところ最低賃金ギリギリの額です。立ち上げメンバーは、まるつきり無償のボランティアです。

大滝 昔は、地域おこしというが無償ボランティアが当たり前でしたからね。最低賃金でも雇用を生み出した高根の場合は、一歩進んだ事例なんですよ。これが当たり前になっていけばいいのですが。

益田 高根フロンティアクラブの活動自体でお金が出なくても、それをやることで他に儲けが出ればいいんですかね。どうなんでしょう？

遠山 実は、食堂I R O R Iを開設したことで、集落内で独自にお金が回るようになってきています。例えば、年間を通じて食堂I R O R Iで蕎麦が出すために、高根では地元農家に蕎麦栽培を委託しています。蕎麦を栽培すると国から補助金が入ってくるんですね。それを「ひまわりフェスティバル」等のイベント費用に充てたりしています。また、食材はなるべく地元のものを使いたいので、農作物を集落内から仕入れるようにしています。金額的にはたいした額ではないですが、集落内でお金が回っている状況をつくるようにしています。見えない部分で儲けが出ていることはありますね。



益田 それだったらいいですね。食堂 I R O R I で頒布会をやるのもものすごく好評で、案内を出す前から満杯になってしまふんですね。四十五人くらいしか入らないから、毎回十人くらいはお断りするんですよ。倍ぐらいの広さがあるといいんですけどね(笑)。県外のお客様も固定客になってきていて、効果をあげていますね。

大滝 それは高根という集落の力でしようか。

益田 それは間違いないですね。都会の人にとつては、我々から案内を出さないと高根という集落がどこにあるかわからない。どん詰まりの集落に来てみたら、出て来た蕎麦や山菜、雪中貯蔵の鈴ヶ滝が美味しい!どぶろくも造っているし、ピザも焼ける。こんな田舎にこれだけのものがあると、一度来たらずみやみつきになるのは当然ですよ。

遠山 確かに、「また来年来るからね」と仰って帰る人は多いですね。

社員教育の一環で始めた田植えが企業アピールの場に

大滝 大洋酒造さんは、高根で米作りもしているそうですね。

益田 社員教育の一環として始めてから、かれこれ十年くらいになります。田植えも稲刈りもしたことがなく、どんなところで酒米が栽培されているのかわからない社員が半分くらいいるので、ぜひとも体験させたいと思ったのがきっかけです。ただ最近、当社の姿勢を外部にアピールする場になってきていますね。社員の他に、新潟の料亭や販売店、ファンクラブの方々にも参加して頂き、五十〜六十人で田植えや稲刈りをしています。酒屋さんなどは「この前、稲刈りしてきてさ…」とか「そのお米でつくった酒がこれだよ」などといった会話がお客さんとされているようです。

大滝 年々社員の意識は変わってきましたか?

益田 そうですね。社員も始めのうちは田植えや雪中貯蔵をやるとか、人形様めぐりの会場に蔵を開放するとか、普段の仕事以外になんでこんな余計な事をやらなくてはいけないんだって気持ちがあったと思いますよ(笑)。しかしそれを何回もやっているうちに、狙い所とか効果が理解できるようになつてくるわけです。和水蔵(なごみぐら)という展示蔵を開設してからは、観光バスがたくさん来るようになりましたから、意識はかなり高まりました。



ね。

ローカルブランドならではの魅力 づくり

益田 当社がナショナルブランドを相手にして生き残っていくためには、ローカルブランドとしての差別化を図る以外、方法は無いと考えています。ナショナルブランドの主戦場であるスーパーマーケットでは、当社では太刀打ちできない価格競争があります。材料から作り方まで全然違うので、二リットル八百円の酒が売っています。当社の酒は一・八リットルで一番安いのが千七百円、倍以上違います。飲むだけで違いがわかるいい味覚を持ち、値段が倍もする酒をわざわざ買ってくる人ばかりだったらいいのですが、酒なんて酔えればいいからみんな同じだ、と思っている人の方が圧倒的に多いのが実情です。価格競争以外の差別化を図るには、ローカルの良さをどんどんアピールするしか方法はないと思っています。だからこそ、和水蔵だったり高根の雪中貯蔵といった取り組みが生まれ、それが通信販売に繋がったりするわけです。輸出用の酒のラベルは英語で書いてありますが、新潟県村上の作り手の名前、使った米などが記され、アメリカ人にとっても日本のローカルで出来た酒であることが売りになっています。高根フロンティアク

ラブは、当社の強力な味方なんですよ。高根も当社を味方にし、お互い利用し合えばよいと思っています。

企業のマネジメント力が高根を ベルアップさせた

遠山 大洋酒造さんのプロとしてシビアに仕事に向き合う姿勢は、大変勉強になりました。お酒という商品をただ造ればいいのではない。当然美味しく造ること、どうやって販売し、どういふふうにしたら食堂も賑わうかとか。我々も感化された部分は結構ありましたね。

益田 そう言ってもらえるとうれしいですね。最初に高根の皆さんのお話を伺った時、熱意はあるんだけどテクニクを持っていないんだなあとということが一番気になりました。ですから、それを伝えることが私の役割ではないかと思っただんですよ。ただ最初はね、「高根の人もプライドがあるからそんなこと言ったら怒るよ、嫌われたらそれで終わりだよ」って言われたんですよ(笑)。だけどどうしても大切なポイントだったので、恐る恐る言ってみただんです。そうしたら、皆さんはそれをしっかりと受けとめてくれて、実践したんですね。メディアを呼び、村長を呼んでイベントやる。これはすごく嬉しかったですね。だから、我々はもっ

とお手伝いしよう！という雰囲気になり、それが雪中貯蔵のイベントにつながりましたよね。

高根では他の企業とも交流の輪が 広がっています

大滝 高根は他の企業とも連携したりしていますよね？

遠山 TOTTOさんとは七年のおつきあいがあります。どんぐりの森づくりということで植樹活動を支援してもらったり、新潟支店のシヨールームで高根の宣伝をさせてもらったりしています。キヤノンマーケティングジャパンさんとは四年になります。キヤノンさんは「棚田のふるさとづくり」ということで田植えをさせてほしいという内容で、東京から年に四回一泊二日に来られます。交流会では、当然大洋酒造の酒を出します。飲めばやっぱり美味しいんですよ。女性四人組の社員が、帰りに和水蔵に寄って買って行くって言っていましたよ。ローカルブランドだから、都会では飲む機会があまりないみたいですからね。

益田 東京の東京會館で開催している「大洋盛を味わう会」の参加者の方々に、村上の地酒は村上で飲んだ方が一番美味しいから来てみませんか？って声かけてみたんですよ。和水蔵集合と



いう形にしたいんですけど、今年は八人の参加がありましたよ。社長、専務、総務部長が直接ご案内させて頂きますが、高根にお連れすることもあります。こんなふうには、一つの繋がりが色々な形で広がってきていますね。

遠山 キヤノンさんもOTTOさんそれぞれ年間で百人ぐらいの方が参加されるのですが、我々としては「集落のこと知ってもらいたい」という気持ちを持って、毎回受け入れを行っています。こんな田舎、テレビでしか見たことないでしょうから、来れば「すごいところですね」と言ってくれます。

受け入れの大本になっているのは高根フロンティアクラブですが、集落の方にも参加・交流するので、参加者からは生の声が聞けていいと好評です。もつと高根の人と仲良くなって、例えば一年間のお米を買っていただけたらどうか、そんなふうになったらいいなとは思っています。まだそこまでは行っていませんね。もちろん、高根のお米を買って頂いてる方は一杯います。キヤノンさんの社員の中で、高根フロンティアクラブの会員になられた方もいるんですよ。

益田 それは、大企業のソーシャルマーケティングという側面もありますね。社会に還元している企業の姿勢に消費者が魅力を感じてくれるといいな

という。大洋酒造も小さいながらもソーシャルマーケティングをやっています。「大洋酒造はまちづくりに一生懸命協力している酒蔵だ」とイメージを発信し、消費者もそこに価値を見いだしてくれて、当社の酒のファンになってくれるといいなと思っています。社員からは、そんな余計なことして売り上げ伸びるのか？だったら直接売り込んだ方がいいのではないかと？と言われますが、今は買ってくれなくてもなかなか買ってくれない時代ですからね。遠回りかもしれないけど、今の時代のトレンドにあった企業じゃないとダメなんだと思います。

集落での受け入れ体制を整えるには三十〜五十代がポイント

大滝 山間にある集落の場合、外から来る人の受け入れがなかなか難しいというところが少なくありません。そんな中で高根はいろいろやっていますよ。何がポイントなのでしょう。

遠山 高根でも「誰が受け入れるか」という問題はあるんですよ。七十代の人はこのままでいいと言います。しかし三十〜五十代の人は、このままじゃいけない、何とかしないとダメだ、という意識が強いと思います。

大滝 三十〜五十代の受け皿づくりが



ポイントになりそうですね。

遠山 そうですね。受け入れる環境ができていないと、来てもらってもなかなか対応できないですね。今は交流事業という言葉を使いますが、当初は人を高根に呼ぶという意味で「高根にこいつちゃ（高根においでよという意味）」という言葉を使っていました。まずは集落に来てもらって、交流したり、集落を見てもらったりすること。それが次につながると思っています。

益田 山奥の集落は、ひっそり暮らしていて、ヨソ者には警戒心を持っているような田舎のイメージがありますよね。でも高根は全然無い。積極性がある。人の話も聞く度量がある。行動力もある。すばらしいと思う。だから不思議ではない。

遠山 どの集落でも何か物事を始める時は白紙なわけです。まずは五、六人が集まって自分たちの夢を語り合う。そのうちに情熱がわいてきて、具体的な行動に移る。共通意識が広がっていくと、一気に組織ができてくる。これはどこでも同じだと思いますよ。高根フロンティアクラブは結成から十八年間活動をしてきていますが、最初は「俺たち頑張ればどうにかなる、みんな頑張れば何とかしよう」と

いう気持ちが大きかったです。しかし、どんなに優秀な組織・個人でも、一人・一つの団体では地域なんて変えられないのです。やっぱり、みんなを巻き込んでいくことで初めて地域がよくなっていくと思います。これは、長くやってきて学んだことの一つです。つながりは大切です。大洋酒造さんもおつき合いのある企業さんも学生さんも。こうしたつながりを、これからも大切にしていきたいと思っています。

これから

益田 和水蔵を基点にして、村上の色々なものを結び付けたいですね。和水蔵を基点にするということは、結局、大洋盛ファンを増やすということにつながりますからね。

遠山 高根は山奥にあるので、冬場はたくさん雪が降り積もります。いくら交通の便もよくなっても、交流という面では冬場は厳しい状況になります。だからこそ、二月の雪中貯蔵・春の蔵開きイベントは大切だと思っています。大洋酒造さんとおつき合いは、今後も大切にしていきたいと思っています。

地域外の企業と地域の 協働事例3題

株式会社ノバレーゼ×山北地区
キヤノンマーケティングジャパン×高根集落
TOTOグループ×高根集落



地域に入って 感性を磨く



写真(上)：管理の手が行き届かない棚田の草取りに励む参加者。全員農業未経験ながら、「おいしいお米」を育む苦労を、若さと気力で体感しています。

写真(左下)：ノバレーゼと山北のコラボによる地域づくりのワークショップ。地方や農家の課題に、自分自身と企業がどう関わるべきかを真剣に考えます。

写真(右下)：養鶏場での採卵体験。山北での活動のきっかけとなった「放し飼い鶏の卵」生産農家の情熱と地域愛を実感しました。

(株)ノバレーゼ(結婚プロデュース等業)は、社会的責任活動(CSR)として平成二十三年から村上市山北地区で「食」と「農・林・漁業の振興」をテーマに活動してきました。きっかけは、地元の「放し飼い鶏の卵」生産農家の情熱に惹かれた社員教育コーディネーターの紹介でした。従業員五百七十七人、平均年齢三十・四歳の若い社員を擁する当該社では、新規事業提案制度を取り入れており、社員個々の意識と積極性は極めて高いものがありました。普段は結婚式場やレストランで働く農業未経験者ながら、田の草取り、山焼き準備など、食糧生産過程の作業の持つ意味に感心しながら炎天下の汗を楽し

むかのように朗らかで、かつ質問魔でもありました。夜は地域農家の話に耳を傾け、自分と企業がその課題にどう向き合えるかを語り明かし、新潟や東京の店舗で山北食材にこだわったレストランメニューや弁当販売を実現する成果を挙げると共に、研修以降も山北を訪れ「人と食」の交流を深める活動を展開しています。

訪れる度に彼らが感動するのは、米や野菜等の食材のおいしさと、ありのままの自然景観です。

作業を終え、棚田の土手に腰掛け、夕日を眺めながら食べる塩むすびと漬物、手づくり味噌の冷汁は年に一度の最高のディナーとなります。

未来につながる 棚田を守る



キヤノンマーケティングジャパングループ（以下、キヤノンMJグループ）は、子供たちの未来に、多様な生き物を育む美しく緑豊かなふるさとを残すことを目的に、「未来につながるさとプロジェクト」を国内のさまざまな地域で展開しており、そのうちのひとつとして、平成二十二年五月から新潟県村上市高根地区で「棚田のふるさとづくり」を行っています。

きっかけとなったのは、平成十九年から高根地区で里山整備や棚田保全活動を行っている首都圏にある認定NPO法人共存の森ネットワークとのつながりです。

キヤノンMJグループ・認定NPO



写真（上） 集落で行われる運動会に社員の方々が参加し、過疎化で参加者が少なくなるイベントを盛り上げています。

写真（左下） 秋の稲刈り、倒れた稲を全員で起こす作業。収穫されたお米は社員の方々にも販売されます。

写真（右下） 春の田植えから草取り、草刈りと、年間プログラムで棚田保全の協力をしています。

法人共存の森ネットワーク・高根フロンティアクラブの三者が協働した活動は活気にあふれ、年間プログラムの棚田でのお米作りは、田植え、草取り、草刈り、収穫と季節ごとに地域の方と一緒に汗を流します。

また集落行事への参加等、豊かな自然を体感しながら、交流を深めています。現在は会社の活動以外に個人で集落行事に自主的に参加される方々もあり、第二のふるさととして交流が進んでいます

どんぐりの森をつくる



TOTOグループでは、植樹や地域清掃などの環境に関わる社会貢献活動を「グリーンボランティア」と称し、グループ社員のボランティア参加を促進しています。

主な活動内容は、「TOTO水環境基金」の助成団体が主催する環境活動や、グループ社員が自ら育てたどんぐりの（ナラ）苗木を植える「TOTOどんぐりの森づくり」です。

全国の中の一つフィールドとして、平成二十年から高根地区での「どんぐりの森づくり」の受け入れを始めました。きっかけは、地区内で森づくりの講演をしていただいた先生のご紹介でした。

森づくりの活動では、集落の有休地に植樹しました。その後は下刈り等の作業に年二回来られています。作業後は両者で懇親会も行い親睦を図ります。また社員の方々は集落のイベントにも積極的に参加いただいています。また地区としても、TOTOで行われる展示会のイベント等に参加、協力しながら交流を進めています。

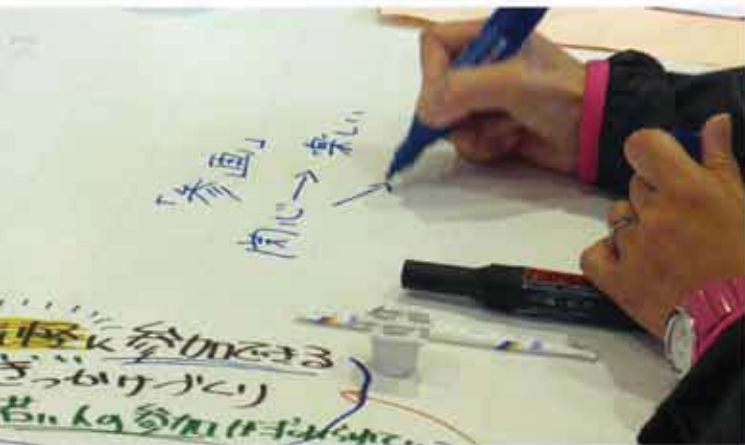
また高根ボランティアクラブでは、TOTO水環境基金を利用し、ピオトープの整備や水辺の活用を図り、子供達の自然体験の場所として利用されています。



写真（上） TOTOの商品展示会で地域PRのブースを作ってくださいパネル展示や地域の特産物販売など行います

写真（左下） TOTOイベントで、竹とんぼづくりなど体験していただき家族来訪者に楽しんでもらっています。

写真（右下） TOTO水環境基金を活用し耕作放棄地をピオトープに変え子供達の環境教育の現場として利用しています。



それぞれの強みを生かす

NPO どうしの協働事例

いわふね地域のまちづくりを、おいしく楽しく語り合おう！



まちカフェ

MACHI cafe

まちカフェとは

まちカフェとは、村上・岩船地域のまちづくりを、カフェのようなリラックスした雰囲気であるいろいろな方と語り合う場のことを称しています。

まちづくりの集会というと、とかく構えてしまうことが多く、会議やワークショップといった、何かを決める、まとめるというスタイルになりがちですが、ここではあえて年齢や性別、地域、立場という垣根を越えて、より多くの方々とながらり合うことを目的にしています。

コトの起り方

このまちづくりに関する自由な意見交換の場が生まれることになったのは、平成二十四年の春、いわふね青年会議所との出会いがきっかけでした。

もともといわふね青年会議所も都岐沙羅パートナーズセンターも、村上・岩船広域圏という同じエリアを活動の舞台にしている団体ですから、これま

であまり接点がなかったこと自体、不思議なことだったかもしれません。

当時いわふね青年会議所のまちづくり委員会の委員長をしていた加藤善典さん（翌平成二十五年度の理事長が、委員会の事業推進に関する相談に乗ってほしいということで都岐沙羅パートナーズセンターに來られました。

いろいろとお話しを聞いてみると、いわふね青年会議所が考えているまちづくり構想（岩船広域圏のまちづくりデータベースの整備など）を実現するためには、もともと多く多くの市民を巻き込み、対話していく必要があると感じました。そこで私たち都岐沙羅パートナーズセンターと共同開催という形で、最近全国的に話題となっている「ワールド・カフェ」の手法を使い、多種多様な方々とまちづくりに関する意見交換会を開いてはどうかと加藤さんに提案しました。

この提案を加藤さんは快く受け止めてくださって、いわふね青年会議所に持ち帰り、早速実現に向けて準備が始まったのです。

第一回まちカフェの開催

第一回のまちカフェは、平成二十四年十月二十七日に開催されました。

会場になったクリエート村上には、まちづくり協議会メンバーやNPO、行政職員、各種事業者の方々など、約

人材育成を考える

楽しい雰囲気、集まりやすい場の設定が必要

- ・気軽に参加できるきっかけづくり
- ・最初は行きにくい一歩でも来て見ると楽しい
- ・公共的な学びの場があるといい
- ・若者の気づきをつくるには失敗させてあげる

まちづくりを学べる場が必要

- ・平田大六さんの人づくり道場みたいなものがあるといい
- ・公開授業みたいなものが多数あればいい
- ・これまでは継続性のある地域づくり勉強会が少なかった

後継者を育てるための指針を作る

- ・後継者には背中を見せ、地域の魅力を再発見させる
- ・見返りが少なくても続けていくことが大事

拠点を考える

拠点のイメージを共有する

- ・気軽に立ち寄れる、いつも誰かがいる場 (知識のあるコーディネーターや地元のお年寄りなどがある)
- ・オープンな施設で近隣住民も集まれる
- ・まちカフェみたいな場。他団体との繋がりを持つ場所
- ・写真展などイベントが出来る場所
- ・他団体の知恵を集める場所
- ・情報を集めて、発信できる場所
- ・空店舗や空き民家、廃校などの利用を図りたい
- ・物理的な場所だけでなく、データベースが拠点になるのではない
- ・場所だけでなく「人」が拠点なのは？
- ・各地域にサテライトを設け、それをまとめるセンターが必要

拠点を考えるための課題

- ・今は地域全体のまちづくり活動をまとめる場所がない
- ・それぞれが単体で活動している
- ・資金をどのように集めるか
- ・人材をどのように確保するか
- ・行政にきっかけづくりを行ってもら

POINT! まちカフェのような参加型のイベントを継続させる

POINT! 継続的にまちづくりを学ぶ機会をつくる

POINT! みんなで拠点をイメージを固める作業が必要

POINT! お金と仲間をマッチングさせる仕組みがあるといい

POINT! 行政に対する拠点設置の提言をまとめる

情報発信を考える

情報を発信しやすい環境と仕組みが必要

- ・事業費に対する広報費の割合が大きくなるのでリスクが大きい (効果が出ない場合もある)
- ・デザインが重要
- ・伝えたい情報を絞らなければならない
- ・いつでも情報が手に入る拠点があるといい

情報発信はみんなでやるのが大事

- ・楽しさを口コミで伝えていく手段を考える
- ・人脈を使った情報発信の仕組みづくりが重要
- ・各団体が相互に情報発信する仕組みがあるといい

使える媒体はすべて使う姿勢が大切

- ・ターゲットによってツールを換える
- ・発信する情報だけでなく、「人」を紹介する
- ・地元からの情報発信を工夫し広める
- ・FacebookなどのSNSを有効に活用する

参加を考える

まちづくりに参加する若者が少ない

- ・活動していても人手が少なく限られたことしかできない
- ・若い年代はまちづくりに興味がない (昔は自然と人が集まってきた)

まずは仲間づくりから始める

- ・小さいお子様からお年寄りまで幅広く参加型のイベントが必要 (子供の頃から参加することが大切)
- ・地元以外からの参加も増やしたい

まちづくりの情報発信が重要

- ・参加しやすいイメージをもてるようなチラシをつくる
- ・参加することが「魅力ある」という団体にならないといけない

参加の喜びを伝えたい

- ・達成感を得られる場づくりが必要
- ・継続することで参加人数を多く集客できる

POINT! 将来に希望を持つためにも、まちづくりのビジョンをつくる

POINT! お金を集めるには、団体の状況を知ってもらう仕組みが不可欠

POINT! お金を集めるには、出しやすい仕組みと面白い仕掛けが必要

POINT! 達成感を得られる場づくりが必要

資金集めを考える

事業費を生み出す仕組みが必要

- ・会費だけで事業費を賄うには限界がある
- ・事業継続のためのスポンサーが欲しい

自分たちの活動が「地域に知られている」ことが重要!

- ・企業がお金を出しやすくなるための情報発信は重要
- ・団体のことが地域に知られているかどうかは大切なポイント
- ・地元以外の人からも資金を集める仕組みはつくりたいか?

共感を生み出す仕掛けと仕組みをつくらう

- ・人々がお金を出しやすい仕組みがある
- ・仕掛けの面白さも重要
- ・協賛を集めた場合はどのように使用されたか、収支を報告したほうがいい



まちづくりファシリテーター研修会の開催

七十人が集まりました。ここで話されたテーマは、以下の五つです。

- まちづくりの資金集めを考える
- まちづくりの情報発信を考える
- まちづくりの参加を考える
- まちづくりの拠点を考える
- まちづくりの人材育成を考える

会場に運び入れた十四の丸テーブルには、それぞれのテーマが事前に割り振られ、その中で参加者は自分が話したいというテーマのテーブルについて自由に討議してもらいましたが、このまちカフェは二十分単位でテーブルを移動して三ラウンド行うスタイルを取りました。

また三ラウンドが終了後、いわふね青年会議所がつくりたいと思っていたまちづくりデータベースについても、全テーブルで協議する場面をつくりました。

このようにして第一回のまちカフェは成功裡に終了しました。こちらで用意した手づくりのケーキや、本格的なコーヒーも大好評で、参加者からは今後も継続して開催してほしいという意見が数多く出されました。

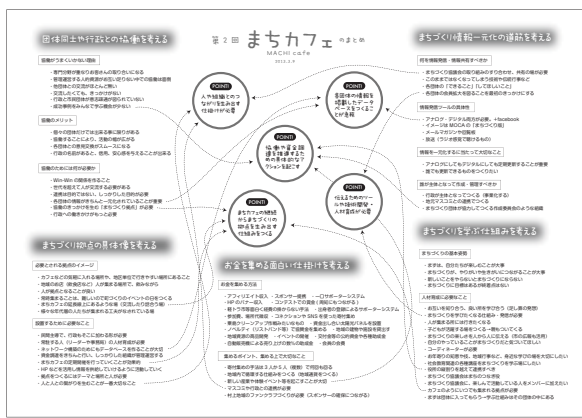


研修会の案内チラシ

第一回のまちカフェが終了した後で反省会を持ったところ、私たち（都岐沙羅パートナーズセンターといわふね青年会議所）はもつとファシリテーターとしてのスキルを磨く必要があるという意見が多く出され、合同でその研修会を開催することになりました。

開催日は平成二十五年二月十一日。講師はNPO法人まちづくり学校から派遣していただき、主にワークシヨツプの基本並びにファシリテーションングラフィックの演習、またそれを使った会議手法などを学びました。

このまちづくりファシリテーター研修会には私たちのメンバーはもちろん、まちカフェに参加された市民や行政の方々、また他の市町村からも多くの参加者がありました。これはまちカフェの中で、これからのまちづくりを担う人材育成が大切だという声が多く出されていたこと、参加型のまちづくりを学ぶ機会を持つべきだという意見が多かったことが、具体的な形になって現れたものだと思います。



第2回まちカフェのまとめ

第二回まちカフェの開催

第二回のまちカフェは、平成二十五年三月九日、会場を村上市民ふれあいセンターに移して開催されました。

参加者は第一回目の時とほぼ同数の方々が参加してくれて、会場は熱気に包まれました。

第二回は第一回の話し合いの結果浮かび上がった以下の五つのポイントがテーマとして設定されました。

- まちづくりを学ぶ仕組みを考える
- まちづくり情報一元化の道筋を考える
- 団体同士や行政との協働を考える
- お金を集める面白い仕掛けを考える



○まちづくり拠点の具体像を考える

この回は約1ヶ月前に行ったファシリテーター研修会の成果が上手く発揮されてきて、それぞれのテーブルでの記録も話し合いも、第一回の時よりも格段によくなっていました。

第三回は夜のまちカフェ テーマも「協働」に絞り込む

第三回は平成二十五年十一月五日、村上プラザの二階ホールで開催しました。一階ではいわふね青年会議所がまちづくりデータベースづくりの一環として、この地域のNPO等の活動をアピールするためのパネル展示を行っており、それとセットにする形でこの第三回を開催することになりました。

これまでのまちカフェは土日の日中開催というスタイルを取ってきましたが、もっと気楽に集まれる場でありたいという要望もあつて、夜の開催を実験的に行いました。

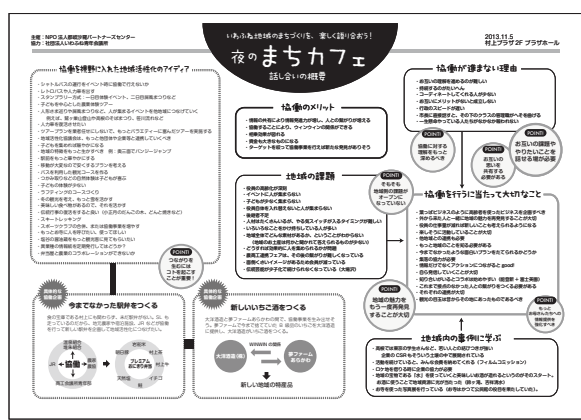
またこれまでは五つほどのテーマを設定して皆さんに話し合っていたのですが、今回は「協働」というテーマの一本に絞り、行政と民間が、企業とNPOが、或いは私たちのようにNPOどうしが連携・協力し合って、地域のまちづくりを支えるにはどうしたらいいか、或いはそこにとどのようなアイデアがあるかといったことが話さ

れました。

ここでの成果として特筆されるのは、具体的な協働の種がいくつか見えてきたことです。

例えば地元の酒造会社といちご農園の方が話し合った結果、今まで商品にならなかったB級品のいちごを回収して、それでオリジナルのいちご酒を造るといふアイデアが生まれてきたり、村上の特産である鮭や村上牛、天然塩、岩船産コシヒカリ、村上茶、朝日豚などの中から厳選して、村上オリジナル駅弁をつくってはどうか、といったアイデアも生まれました。

こうしたアイデアはそのまま放置せず、次回以降のまちカフェ並びに他の事業の中で具体化できるように取り組んでいくことを確認しました。



第3回まちカフェのまとめ



第四回は企業とNPOの協働事例を紹介

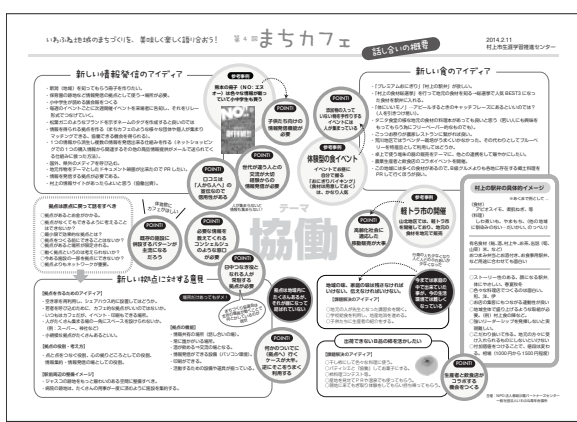
第四回は平成二十六年二月十一日に村上市生涯学習推進センターで開催しましたが、参加者は何と九十人を超えるというこれまで最高の盛況ぶりを見せました。

今回のテーマも「協働」を継続しましたが、第三回で生まれたアイデアなどもこの場で取り上げ、具体化をさらに進めることができました。

ここではこの冊子の冒頭にも掲載した大洋酒造株式会社と高根フロンティアクラブとの協働事例を、直接当事者からお伺いするプログラムを組み込みました。ゲストとしてお招きしたのは高根フロンティアクラブ会長の遠山政好さんと、大洋酒造株式会社専務の中村行善さんで、二者が協働することになったきっかけから、協働することの意義や効果までをお話しいただき、協働というテーマを深く掘り下げることができました。

今回のまちカフェはテーブル数が十六と多かったこともあり、協働というテーマの下に、前回までの話し合いの流れを継承した「食」「情報」「拠点」という小テーマを設けて、話し合いを行いました。その結果、具体的に活動する上での悩みや困り事、或いは実際に協働をしたいという個人や団体の思

いに対して、多様な参加者からの意見や助言が集まりました。特に拠点に関しては、第一回目の頃から比べるとずいぶんイメージが明確になってきており、実現する日も近いという印象を持ちました。



それぞれの団体の強みと弱みを認め合う

このまちカフェはこれからも二者が協働して継続する予定ですが、そのためにはそれぞれの団体の強みと弱みをそれぞれがしっかりと認識し、お互いが足りないところを補い合っていく姿勢が必要だと感じています。

またそれに伴ってお互いが成長できれば、それが協働をした最大の成果であろうと考えています。

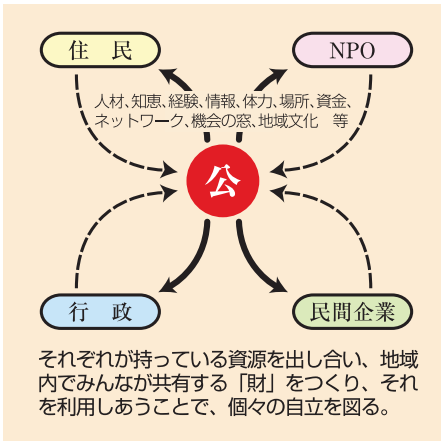
第4回まちカフェのまとめ

様々な協働を 応援しています

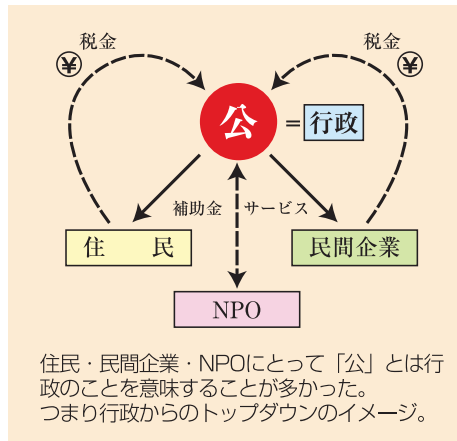
MISSION

私たちは、地域内の財を集め、つなぎ、支えながら、広がりのある「公」を創造することで、持続可能な地域社会づくりに貢献します。

私たちがめざす「公」とは…



これまでの「公」とは…



私たちが都岐沙羅パートナーズセンターは、村上・岩船地域の元気づくりを応援する中間支援組織として、平成十一年から様々な事業を展開しています。これまでにコミュニティビジネスの育成や多様な分野における地域づくり事業のコーディネート、NPOやまちづくり協議会などの住民活動支援を行ってきた結果、数多くの実績と支援ノウハウ・ネットワークを蓄積しています。

これからの地域づくりにおいて、「協働」は最重要課題です。一言で協働といってもその内容は様々ですが、私たちが近年着目しているのは「民と民の連携」です。お互いに手を結ぶことで問題が解決したり、ウインウインの関係となってお互いが更に飛躍していく可能性を大いに秘めています。

お互いがウインウインの関係になる協働を、もつとも増やしていきたい。そんな想いを具体化するために、私たちが都岐沙羅パートナーズセンターは、様々な協働を応援する活動に力を入れていきたいと考えています。

協働を応援するための都岐沙羅 パートナーズセンターの取り組み

一 まちカフェをこれからも定期的に開催します。

この冊子でもご紹介している「まちカフェ」からは、多様な主体同士の協働の種が生み出されています。こうした協働の種をもっとたくさんつくっていくためにも、まちカフェは今後も定期的に開催していきます。

二 協働の種を丁寧な育てていくためのコーディネートを行います

まちカフェから生まれた協働の種は、そのまま放っておいても芽がでない（＝協働の取り組みが動かない）可能性があります。私たちが都岐沙羅パートナーズセンターは、協働の種を丁寧に育てていくためのコーディネートをを行います。具体的には、

- ① 関係者を集めた相談会や打合せ
セッティング
- ② プロジェクト初期期の事務局機能
の担当
- ③ プロジェクト全体のコーディネー
ト（資金調達を含む）
- ④ 地域内外のネットワーク形成支援
- ⑤ 専門家の紹介、勉強会の企画
などを行っていきます。

まずはお気軽にご相談下さい！

発行日 平成二十六年二月二十日

制作 NPO法人 都岐沙羅パートナーズセンター

協力 大洋酒造株式会社

高根フロンティアクラブ

株式会社ノバレーゼ

キャンノンマーケティングジャパン株式会社

TOTO株式会社

一般社団法人 いわふね青年会議所

村上市山北支所

この冊子は、国土交通省地域づくり活動に対する中間支援活動のコンテンツ整備のための優良な取組事例調査「多様な担い手の連携・協働によるCSV（Creating Shared Value）創出プロジェクト」によって作成されました。



広がりのある公をつくらう

NPO 法人 都岐沙羅パートナーズセンター

〒 958-0261 新潟県村上市猿沢 1238 番地

Tel : 0254-72-0663 Fax : 0254-72-0723

E-Mail info-tsukisara@tsukisara.org

<http://www.tsukisara.org/>